

高大接続

現実の制約の中で高校生が探究的・意欲的な 学びを続けられる環境とは

北海道教育大学函館校
准教授 山口好和

今年度の本学函館校地域協働推進センター「高大接続」事業について、函館市内の高校と行った共同研究の紹介と、高校の探究活動を論じた諸行事に参加して得られた成果を述べる。まず、この数年間共同で「探究学習」の教材・カリキュラム開発を行ってきた函館西高等学校（以下、函館西高校）との取り組みが、今年度どう進んだかを簡単に示しておこう。

2021年5月初旬に同高「探究部」の協議に参加して、具体的な共同作業の課題を探った。ただしそこでは新学期開始直後であることと、コロナ禍での教育活動の様子が不透明なことから、学年共通の教科書（『一生使える探究のコツ 入門編・練習編』（株）トモノカイ発行）を使用することのみが決まっていた。

新年度に入り、上記テキストを使用した調べ活動の基礎演習や（写真1）、地域の教育資源、魅力向上に関する講演会などが実施されて、生徒たちは熱心に取り組んでいた。例えば5月11日に開かれた講演会・ワークショップ「縄文遺跡群を通して函館を考える」では、講演後グループに分かれて函館の魅力を伝えるポスターを作成した（写真2）。しかしその後、コロナ感染防止を優先したために前年度計画していた近隣地域の調査活動がほぼできなくなった。そこで10月から11月にかけて「SDGs」を主題に、校内に居ながら世界を知るといった活動で、調べ方・まとめ方や情報共有の方法を学ぶ機会を設けた。

活動の冒頭では、世界各地の若者が抱く夢を国別に編んだ書籍を読み、自らが担当する国の実際と現在抱えている課題、それらの解決法、日本との関わりについて調査を行った（教材には、WORLD DREAM PROJECT編『WE HAVE A DREAM 201カ国202人の夢×SDGs』いろは出版 2021年を使用）。

続いて情報共有の際には〈発表資料の基礎に400字レポートを使用する〉〈説明には写真、統計グラフを用いる〉などの制約を設けて、情報共有、意見交換の学習スキルを高める工夫が施されていた（写真3）。さらに共有時の組み合わせにも、地域間の共通性や相違点に気づきやすくするための編成や、構成人数に段階を設けるなどの配慮がなされていた。また情報共有時に各クラスで個別に見られた工夫として、黒板や計時の工夫、質問ルールの設定、デジタル地図の活用などがあった（図1はワークシートの一部）。

函館西高校ではかねてから、このような学習を通じて生徒たちがどのように自分自身を見つめているのか、継続的なアンケート集計を実施してきた（4月、7月、11月にそれぞれ「自己開示力」「課題発見力」「段取力」「思考力」「発信力」の達成度を「0～4」で測る）。今年度は次のような傾向がうかがえた。

1組から6組まで共通の結果として、「自己開示力」「課題発見力」「発信力」の項目で回を追うごとに上昇する傾向が見られた（約2ポイントから3ポイントへ）。また4つのクラスでは、「思考力」

が3ポイントから2.5ポイント辺りへ低下していた。同じ「思考力」について1つの組では横ばい、もう1つの組では2.5ポイントからやや上昇の兆しが見られた。このばらつきは、高校1年生自身が「思考」というものを、新しい知識を得る以外に様々な表情を持つ行為として認め始めたことを示しているのではないだろうか。たとえば「思考力」が「2ポイント」と低めの自己評価をした生徒の自由記述には、「何かを考える時や調べる時物事について浅く軽い気持ちで行っていたが、探究を行って物事について深く考えたり調べたりした」と書かれていた。これは思考力が伸びていないのではなく、むしろ自らの評価基準が探究学習を通じてより精緻になっていることを示している。

こうした実践の様子を確かめつつ、2022年1月に本学函館校国際地域学科地域教育専攻に所属する4年生3名と懇談の場を設けた。自身の高校生活を振り返りながら、函館西高校で今年度行われた活動がどのような意義を持つのか、また大学での学びにどう貢献すると考えられるかを自由に話し合った。小一時間の意見交換から、以下のような感想が得られた。

○小論文の論題を入試前に慌てて考えなくてもいいように、早い段階からディスカッションの機会があることは有意義である。普段の活動の中に組み込まれているのが良い。またたとえば「SDGs」が典型だが、何通りも答えや道筋のある問題について、高校段階で学習できることが大学での学びや諸活動につながる。

○携帯電話(スマートフォンやタブレットなどインターネット接続できる携帯端末の意味)の利用法は高校ごとに異なると思うが、それぞれの「ルール」の範囲内で少しでも多く調べる習慣を身に付けておけばよかった、というのが実感である。それを思えば函館西高校のように調べる機会が多いことが好ましい。個人でも工夫

できることが様々ある。

○高校在学時に函館に関する学習を経験したが、あくまでも知識量を増やすことが中心であった。今の高校生には、たとえ校内に居ても活動の幅をどんどん広げてほしい。またグループ別、個人別に教育問題を調査した経験を思い出すと、早いうちに多様な意見や価値観が入り混じる機会を経験した方が良いと感じる。

○何回かに分けて「私が身に付けた力」を考える機会があるのが良い。経験や活動の実績をもとに「～～が出来るようになったと思う」という理由が重要である。この蓄積があれば、自己の再発見や別の見方、考え方の機会も増えていく。

今年度の「高大接続」をめぐる取り組みとして、函館西高校との共同研究以外にも以下の実践がある。紙面の都合でより詳しい報告は別の機会に譲りたい。

- ・探究と高校生のキャリア形成意識に関するオンライン研究会に参加。(2021年4月)
- ・国立教育大学協会研究集会分科会で、複数の教科担当教員が作る探究学習、課題学習の単元開発事例を議論。(2021年10月)
- ・高校生が地域課題と直接結びつくスタイルの探究学習について、実践報告・研究協議に参加。(2021年11月下旬)
- ・函館中部高等学校での教科におけるICT活用型単元学習(家庭科の場合)について、年鑑や雑誌記事を活用した教材研究とディスカッションを実施。(2021年12月)



写真1 テキストの活用



写真2 5月11日の活動



写真3 SDGsをめぐる話し合い



図1 SDGsワークシート